

# 韓国における『古事記』研究 (二)

—二〇〇三～二〇〇六年の学術論文を中心に—

田 中 千 晶

韓国における『古事記』の専門的な研究は近代から始められ、特に一九八〇年代以降、本格的に研究が進展し、近年では年間十数本の研究論文が発表されている。『古事記』に関心を寄せる理由として、朝鮮半島に関連した記述の存在、神話の類似性などが指摘されている。<sup>(1)</sup>

本稿では、近現代における『古事記』の受容研究の一環として、韓国ではどのような視覚から『古事記』が研究されているのか、近年の学術論文を紹介する。二〇〇〇年までの研究動向及び、二〇〇〇年～二〇〇二年の三年間における研究論文リストに関しては、拙稿<sup>(3)</sup>を参照されたい。

◇

論文の検索については、R I S S (Research Information Service System)<sup>(4)</sup>を基本とし、補助的にK S I学術論文情報<sup>(5)</sup>と韓国学会誌全文データベース DPrja<sup>(6)</sup>を用い

た。R I S Sで検索対象を韓国内学術誌の論文とし、キーワード「古事記」で検索すると、一八二件がヒットした。<sup>(7)</sup>このうち本稿では、紙幅の都合上、二〇〇三年～二〇〇六年の四年間について紹介する。この期間では二十八件の検索結果が得られたが、<sup>(8)</sup>題目や本文内に加え、論文のキーワードとして登録されている「古事記」も検索されるため、論文の主旨が『古事記』と異なるものも含まれている(研究年表の7、8等)。しかし『古事記』が各方面の研究分野からどのように用いられているかを知るためにも、件数に含めることとする。すべての研究論文の内容を紹介することは困難であるため、発行年順に題目等を記した研究年表を挙げ、一部の論文について要旨を掲載した。<sup>(9)</sup>二〇〇七年以降の論文に関しては、次の機会に譲ることとする。

## 研究年表 (二〇〇三～二〇〇六年)

※番号に□を付した論文は後に要旨を記載する。

	題目	著者	学術誌名、巻号	発行所	発行年
1	国学の観点でみた日本人の生と思想	李梨花	東洋學33	檀國大學校東洋學研究所	二〇〇三・二
2	物部氏と降臨傳承	金末式	研究論文集 (UC REPORT) 29—2	蔚山科學大學	二〇〇三・二
3	『古事記』における「非」、「不」の用字法研究	安熙眞	日語日文學研究45—1	韓國日語日文學會	二〇〇三・五
4	天照大御神と神武	金ソクグン	日本研究論叢18	現代日本學會	二〇〇三・十一
5	天之日矛傳承の考察—渡來と土着を中心に—	崔元載	日本語文學24	日本語文學會	二〇〇四・二

28	『平家物語』に現れた死生観	李ミジャ	韓国日本語文学会学術発表大会論文 集2006-10	韓国日本語文学会	二〇〇六・十
27	古事記―神武天皇記事の性格	全英希	韓日語文論集10	韓日語日文学会	二〇〇六・八
26	記紀歌謡の「場」に関する考察―宮廷儀礼の「場」を中心に	李権熙	東アジア古代学13	東アジア古代学会	二〇〇六・六
25	『古事記』の展開過程研究―須佐之男命の神性を中心に―	崔震甲	日本近代学12	韓国日本近代学会	二〇〇六・五
24	語りとしての歌謡物語について	李権熙	日本研究27	韓国外国語大学日本研究所	二〇〇六・三
23	東アジア叙事文学伝統からの離脱	朴眞秀	亜細亜文化研究10	暁園大学校アジア文化研究所	二〇〇六・二
22	歴史教科書を中心に― 国民国家を保障するものとして蘇った『三國遺事』の世界観 韓国中等教育の	朴正義	日本文化学報28	韓国日本文化学会	二〇〇六・二
21	天照大御神は女神か?―『古事記』を中心に―	李昌秀	比較文化研究9-2	慶熙大学校比較文化研究所	二〇〇五・十二
20	山上憶良の「ノ甲類」と「ヌ」の二重型問題	金テソン	韓国日本語文学会学術発表大会論文 集2005-4	韓国日本語文学会	二〇〇五・十
19	『古事記』王権の語りと歌謡	李権熙	日本思想9	韓国日本思想史学会	二〇〇五・十
18	古事記の「カタリ」と歌謡の利用―「辞」の表現を中心に	李権熙	東アジア古代学11	東アジア古代学会	二〇〇五・六
17	古代日本社会の占に関する考察―万葉集の分析を中心に―	具廷鎬	日本学研究16	檀国大学校日本研究所	二〇〇五・四
16	『古事記』倭建命物語の構造と方法	李権熙	日本学研究16	檀国大学校日本研究所	二〇〇五・四
15	仲哀記の構想・王権の描き方をめぐって	金祥圭	日本学研究16	檀国大学校日本研究所	二〇〇五・四
14	『古事記』『日本書紀』の天孫観―天孫降臨神話を中心に	崔元載	日本語文学28	日本語文学会	二〇〇五・二
13	国文学の方法と歴史研究―『古事記』の「古代」/『日本書紀』の「歴史」―	神野志隆光	日本語文学24	東アジア日本学会	二〇〇五・一
12	古事記の世界観に関する一考察―大年神の系譜の意味―	金祥圭	日語日文学24	大韓日語日文学会	二〇〇四・十一
11	日本呉音の非体系的特質に就いて	金正彬	日本語文学22	韓国日本文化学会	二〇〇四・八
10	比賣基曾社の神に関する一考察	崔元載	日本語文学26	日本語文学会	二〇〇四・八
9	古代日本の哲学思想発展に与えた朝鮮民族の影響	韓明煥	退溪學と儒教文化35-2	慶北大学校 退溪研究所	二〇〇四・八
8	法隆寺創建の真相と日本書紀編纂	関内勳・訳	人文科学論文集38	大田大学校人文科学研究所	二〇〇四・八
7	丸山眞男の『basso ostinato (執拗低音)』に対する一考察	柳生眞	日本思想6	韓国日本思想史学会	二〇〇四・四
6	『古事記』における「死」の漢字表記―『三國史記』『三國遺事』との比較	崔書寧	日本文化学報20	韓国日本文化学会	二〇〇四・二

## 論要要旨（年表より抜粋）

② 金末式「物部氏と降臨傳承」（『研究論文集（UC REPORT）』29—2、蔚山科學大學、二〇〇三年二月）

『古事記』『日本書紀』が成立した七、八世紀は、律令体制を基礎とした天皇專制國家が成立されていく時期であった。両書に記される邇邇差命の降臨神話は、『旧事本紀』に収録されている物部氏の先祖の降臨神話と同一系統の傳承である。特にその神話形態及び、随伴する神々の構造や性格からも類似性は否定できず、物部氏の先祖の降臨傳承が『古事記』や『日本書紀』の編纂とともに、建国神話として発展収録されたものであろうとする。その理由として、五、六世紀頃に物部氏が活躍していたという歴史性からみて、物部氏が古代韓国の移住民氏族と深い関わりがあったことを挙げる。また、天孫降臨神話に現れている五部神が百濟・高句麗の支配階級である「五部組織」を意味するという証明を試みた。

③ 安熙貞「『古事記』における「非」「不」の用字法研究」（『日語日文學研究』45—1、韓国日語日文學会、二〇〇三年五月）

『古事記』において否定表現によく用いられる「非」と「不」の用法を韓・日・中三ヶ国語の用字法という観点から再検討したもの。具体的には「非」と「不」の二つの字の大きな相違点である数詞と代名詞との結合の可否を挙げ、論じた。「不」は可能であるが、「非」は不可能である。そして、仮定条件を表す場合は従属節に「非」が必ず使われるにも関わらず、韓・日両側の資料では本来の用法（中国語）とは異なる形式が見られるという。これについては、古代韓国資料では「非」は否定として認識されなかったため、仮定を表す場合「非」が用いられなかったとする。一方、『古事記』での仮定表現には「非」が使用されたりされなかったりして、本来の用法と差が見られる。このことから、「不」は名詞に先行しないというルールを、仮定表現のルールより優先した太安万侶の表記意識を見出した。また、「是」の否定表記として「非」「非是」「不是」の三種類が使われることについて、『古事

記』では最も早い時期の表記である「非」だけが用いられたということから、ここにも太安万侶の表記意識が覗かれるとする。結論として、否定の二文字には若干の相違は見られたものの、本来の用法には基づいて用いられたと論じた。

④ 金ソクケン「天照大御神と神武」（『日本研究論叢』18、現代日本学会、二〇〇三年十二月）

いわゆる「記紀神話」と呼ばれる日本の神話、特に『古事記』の建国神話を①太陽神であり同時に皇室の先祖神と見なされる天照大御神、②初代天皇としての神武天皇、③彼らの間に置かれていた「天孫降臨と国譲り」に焦点を当て、これらを通じて記紀神話に込められたイデオロギーの解明を試みた論。その結果、記紀神話特に『古事記』神話は「古代天皇制」を後支えるために考案された一種のイデオロギー的装置、換言すれば「空と太陽のイデオロギー」の実現であり、同時にそれを象徴しているということを示した。また天照大御神と初代天皇神武が浮上した側面には、壬申の乱を通じて絶対君主として登場した「日本」の天武「天皇」が積極的に介入したということがあったとする。このような『古事記』神話は永らく忘れられていたが、近代に入り近代の天皇制とからまって今一度政治化する様相を見せることになり、それが超国家主義ないしウルトラナショナルイズムの強力な原動力として作用した時、「歴史の神話化」の絶頂に達したと結論づけた。

⑨ 韓明煥「古代日本の哲学思想発展に与えた朝鮮民族の影響」（『退溪學と儒教文化』35—2、慶北大學校 退溪研究所、二〇〇四年八月）

古代日本の文化は朝鮮文化の影響を受けて発展したことは事実であり、高い文化水準を有していた朝鮮民族が早くから日本領土に積極的に進出して先進文化を伝播し文化発展を先導してきたとし、中でも哲学思想の発展に与えた影響をとりあげ考察した論。『古事記』によれば、百濟國が王仁を送って『論語』をもたらした。このことを契機として、儒教思想を本格的に普及させていったとする。儒教思想の伝播は百濟の人々だけでなく高句麗の人々によっても進行され、『日本書紀』に記された曇徴が日本の人々に仏教思想と共に儒教思想も積極的に宣伝したとする。ま

た、高句麗、百濟、新羅の三ヶ国の人々は儒教思想だけでなく古代日本に初めて仏教思想を伝播して普及させた。仏教の初期思想的発展を見せる代表的例として南都六宗の出現をあげ、この南都六宗の成立と発展が朝鮮の人によって成り立ったということ、具体例をあげて述べる。南都六宗のほとんどは朝鮮人によって成立して発展したとする。高句麗、百濟、新羅など朝鮮の人々によって儒教、仏教のような洗練された宗教的世界観が伝播することによって、古代の日本では哲学的思惟分野で画期的な転換が起きることになったし、未開から文明への跳躍が成された、と論じた。

[12] 金祥圭「古事記の世界観に関する一考察―大年神の系譜の意味―」(『日語日文学』24、大韓日語日文学会、二〇〇四年十一月)

古事記を三巻本に作った背景には、建国の由来、神道の天皇、儒教的な天皇観という各巻の主題の相違の他に、独自の世界観があるとされる。大和朝廷の対外を反映した小中華思想に支えられ、天皇の「天下」は大八島国(日本)を中心として朝鮮(韓国)を朝貢国(蕃国)と見立てており、この基本軸は、中巻仲哀記の新羅征伐伝承が下地になっているとする。新羅領有がいわゆる神功・応神の征服によるというより、神功皇后の祖先であるアメノヒボコによって正統性もち得たことと同様、神代記の韓神など大年神の系譜に載せられた韓国関連の神々が天皇の海外支配領域の伏線として働いた結果ではないかと論じた。大年神の系譜を国つ神である大國主神の物語の中に配置させているのはそのためと推察している。

[14] 崔元載「『古事記』『日本書紀』の天孫観 ―天孫降臨神話を中心に―」(『日本語文学』28、日本語文学会、二〇〇五年二月)

記紀の天孫降臨神話における降臨神の指称語に注目し、両書の世界観の違いを考察したもの。『古事記』においては降臨神の指称語として「天神御子」「天神之御子」を使用しており、高天原の主神たる「天神」(高御産巢日神と天照大御神)の司令を受けて天降る「天孫」(天神御子)「天神之御子」の在り方を、天神に繋がる直系の神として文脈的に特定し、古事記神話の特徴を浮彫りにしているとした。

一方『日本書紀』では「天神」を絶対的存在として位置づけおらず、降臨神の指称語としては「皇孫」「天孫」が用いられ、それにより皇祖高皇産靈尊と皇孫火瓊杵尊が血縁関係にあることを強調し、「皇祖」―「皇孫」―「天皇」という皇統の実現の中で「天孫」を定位づけようとしていると論じた。

[17] 具廷鎬「古代日本社会の占に関する考察―万葉集の分析を中心に―」(『日本学研究所』16、檀國大學校日本研究所、二〇〇五年四月)

古事記をはじめ、日本書紀、万葉集、風土記など、上代文学の範で取り扱う文献を中心に据えて古代日本社会における「占」について検討をおこなったもの。具体的には文献の精読によって得られた資料を分析し、それに註釈や私見を加えている。上代文献の記述によって日本の占を分類すると、公的に行われた占と民間のレベルで私的に行われた占にわけることができる。まず、公的な占としては代表的なものとして太占という、鹿の骨や亀の甲羅を以ておこなう占。これは卜部という下級官吏によって神意を問うかたちをとる。一方、私的に行われた占には、夕占・足占・石占・苗占・水占など、実に多様なものがある。またこのような占は占の結果によって将来を予測するという次元ではなく、あらかじめ決めておいた結論に添う結果は吉兆であり、反する結果は凶兆であるという、単純な二者択一のようなものであることを明示した。

[18] 李権熙「古事記の「カタリ」と歌謡の利用―「辞」の表現を中心に―」(『東アジア古代学』11、東アジア古代学会、二〇〇五年六月)

ヤマトタケルの歌謡物語、その中でも特に弟橘比売の入水物語を取り上げて、『古事記』における「カタリ」と「ウタ」という様式の問題、それによって可能になる『古事記』の表現様式としての歌謡物語の方法を考察したもの。「カタリ」によって表現される叙事性と、「ウタ」の抒情性は相容れないが、散文と韻文という異なる様式によって構成されている歌謡物語は、「カタリ」と「ウタ」の、特に「ウタ」のもつ含蓄性や、それによって期待される抒情の広がりを目指して、最初から意図され試みられた新しい「カタリ」の方法であるとする。そこで著者は、一

字一音式の仮名で書き表した歌を、段落の綴じめ的な位置に据えることで一つの物語を締めくくるといふ、倭建命の歌謡物語の方法を問う。「辞」的表現に依存しないことによつて、ことがらの叙述の積み重ねにおいて可能になる散文表現と、これとは逆に「辞」的表現を徹底することによつて達成される、歌という表現の意識化を『古事記』の表現、ひいては『古事記』の中の物語と歌という表現の問題として捉えている。弟橘比売の入水物語は、弟橘比売の死によつて段落づけられ、倭建命物語全体は倭建命の死によつて括られていることになるが、『古事記』は物語の結末の部分で、死をもつて語るることによつて、物語全体に重苦しい抒情性を漂わせているとする。弟橘比売の歌は「の」「に」「の」「はも」などの「辞」のことばの滑らかな連結によつて、抒情詩的情趣を感じさせる情意が統一されており、しかも結句を「ハモ」という助詞で結ぶことによつて、強い哀惜の念に基づき過去を回想しつつ、離れて行かざるを得ない状況を嘆くという。この歌によつて弟橘比売の死に対する悲哀感は一層高められ、一つの物語はクライマックスを迎える。ひとつの物語を歌によつて締め括るといふ方法は、和歌の世界で育まれた抒情の世界が前提になつてからこそ可能になる、高度な文学的技法である。『古事記』は天皇の世界の確立という大きなテーマを、倭建命の悲運の歌謡物語を通して語るが、ここに『古事記』完成者の文芸的趣向や、創作的意図が強く感じられると同時に、これこそが『古事記』の目指した倭建命物語の方法であつたとする。

[21] 李昌秀「天照大御神は女神か?—『古事記』を中心に—」(『比較文化研究』9

—2、慶熙大學校比較文化研究所、二〇〇五年十二月)

アマテラスはこれまで日本神話において女神としての性格が与えられ、そのイメージが定着されてきたが、『古事記』の上巻及び『日本書紀』の神代巻に記されている日本神話の構造と特徴から見ると、果たしてアマテラスが女神であるかという疑問が生じる。そこで、とりわけ『古事記』に描かれているアマテラスを綿密に分析することでこの問いに答えようとした論。さらに『古事記』に記された女神のイメージを捉え、アマテラスとの関連性を探り、『古事記』の編纂意図について考察している。神名に見える「売(メ)」という称号を至高神であるアマテラスにはつ

けるとは思われず、また女神よりは男神を重視した『古事記』の編纂意図に照らしてみると、アマテラスを女神に取り扱う理由はないと結論づけた。

[25] 崔震甲「『古事記』の展開過程研究—須佐之男命の神性をを中心に—」(『日本近代学研究』12、韓国日本近代学会、二〇〇六年五月)

須佐之男命の神性はいったい善神なのか、悪神なのか、または荒ぶるだけの神なのかについて考察した。高天原では、天岩屋戸の籠もりで見られるように、悪事を働いた荒ぶる神であつた。しかし高天原を追放され出雲に天降つてからの須佐之男命は八咫遠呂智を退治し草薙の剣を得て天照大御神に献上し、出雲の聖地・須賀に宮処を定め、助けた櫛名田比売と結婚するという善神としての須佐之男命の姿である。『古事記』では「宇氣比」によつてお互いに「子」を生みだし、その性別が正邪の判定の基準になつており、又、「宇氣比」には「交接」という神話的意味があると見る。そしてそれが神生みを目的としていることを踏まえ、対立する天照大御神と須佐之男命に存在する間接的な交接という神話的特徴を見出した。須佐之男命が老年期に根堅州國の主宰神となつて大國主神に数々の試練を与えたことは、通過儀礼であり、それは子ども自身が死んで大人として「再生」することであり、最後は葦原中國の國土經營を行い、繁榮と秩序への布石をなしているとする。『古事記』の展開過程において考察した須佐之男命は、天津罪、国津罪、全ての罪を代わりに背負ってくれる救いの神性を持った善神であつたとみなした。

[27] 全英希「古事記—神武天皇記事の性格」(『韓日語文論集』10、韓日語日文学会、二〇〇六年八月)

何故天武は自らを神武に投影しようとしたのか。また、その歴史的な投影をもつて、天武は果たして、何を求めていたかについて論じた。史書の書かれた歴史の構図から推測できるのは、天武の神武への投影には、壬申の乱の正当化というよりは、天武自身の皇位への継承における正当性の追求という側面が強く窺える、とす。したがって「神武記」は、まさに正統に神の血を継承している場面が重視されている神話であるという。このように考えることで、「神武記」は建国の問題より

は、血の継承と正統性の意識の強い神話、すなわち王権神話的要素が強いと言わざるを得ないと結論つけた。

注

- (1) 魯成煥「神話学から見た韓国の記紀研究」(『國文學 解釈と教材の研究』51—1 學燈社 二〇〇六年一月)
- (2) 研究動向に関しては注(1)及び、金祥圭「韓国における日本神話研究の現状」(『古事記年報』46 古事記学会 二〇〇四年一月)を参照した。
- (3) 田中千晶「韓国における『古事記』研究(一)——二〇〇〇—二〇〇二年の学術論文を中心に」(『水門』25 勉誠出版 二〇一三年一月)
- (4) RISSは韓国教育芸術情報院によるサービス。韓国内学術誌論文、海外学術誌論文、学位論文、単行本、学術誌を検索でき、韓国内の学会及び大学附設の研究所が発行する学術誌の論文約九三万件、学位論文については、国内一四〇余大学の碩士(日本の修士に相当)、博士學位論文約三三万件が収録されている。http://www.riss.kr/index.do
- (5) KSI韓国学術情報(Korean Studies Information, KSI)が提供する学術論文データベース。韓国内一二〇〇余の学会及び研究所が発行する学会誌及び研究刊行物に掲載された約八〇万件的論文を収録。http://www.papersearch.net/
- (6) NuriMedia社が韓国最大の書店・教保書店とともに提供する学術情報データベース。約一四〇万件的論文、八〇七機関、一六一一種の刊行物を収録(二〇一二年九月現在)。http://www.dpia.co.kr/
- (7) 二〇一三年一月三日現在。漢字「古事記」もハングル表記「고사기」も同数の一八二件である。
- (8) 韓国の学術誌に掲載された日本人研究者の論文を含む。
- (9) 年表には日本人研究者による論文も掲載した。要旨は、原則として韓国人名の筆者による論文を選択し、私に翻訳し要約あるいは筆者による要旨を簡略化した。論文名等は適宜日本語に変えたが、筆者名の漢字表記が不明なものは韓国語読みをカタカナ表記にした。

## “Kojiki” studies in South Korea (2)

— Academic papers from 2003 to 2006 —

TANAKA Chiaki

**Abstract:** In this article, I introduce the “Kojiki” researches in South Korea. I will analyze the academic papers on “Kojiki” after 2000. South Korea has worked on its researches in full scale since the 1980’s.

The similarity of the myths of Japan and South Korea, and the descriptions of the Korean Peninsula have been mainly discussed there.

**要旨:** 韓国においては、近代に入ってから『古事記』の研究が始められた。朝鮮半島に関する記述の存在、神話の類似性などが研究対象として関心を持つ理由であり、本格的に研究が進展してきたのは1980年代以降である。その研究方法は大きく次の二つに分けることができる。一つは日韓の神話を比較し、日本にいかにか文化的影響を与えたかを解明する研究、今一つは『古事記』『日本書紀』の特殊性をそれぞれのテキストに分離して探る研究である。方法の異なる両者を結び、且つ韓国の『古事記』研究の転機となった研究が、魯成煥『日本神話の研究』(報告社、2002年9月)といえる。本稿ではこの『日本神話の研究』を転換点とみなし、刊行前夜にあたる2000年以降、どのような視覚から『古事記』が研究されているのかについて、韓国内における学術論文を紹介する。